
異次元での転職願い

双静寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異次元での転職願

【Nコード】

N4140W

【作者名】

双静寺

【あらすじ】

とある異世界での戦争で活躍した一人の魔導師。
そんな彼が戦争後、何もする事が無くなり暇を潰すために始めたオンラインゲーム。

いつもと違う自分になりたいという願いを叶える為、1人奮闘していたのだが……。

時同じくして、日本に住む二人の女子高生が人気のオンラインRP
G“Extend my World”が新しくバージョンアップ
される事となり、楽しみにメンテナンスが明けるのを待っていた。

メンテ明けの世界で彼女たちが出会うのは――。

プロローグ「人の生み出す世界」（前書き）

この作品は同作者の小説「異世界への人材派遣」のスピノフ作品となっております。

基本的のそちらを読まなくても問題ないように書いていくつもりです。

なお、更新頻度は「異世界への人材派遣」よりも低くなってしまいます。

こちらの作品は元々「異世界への人材派遣」完結後に書こうと思っていた作品ですので、向こうよりも更新頻度はどうしても落ちてしまいます。

素人が複数の作品を同時に執筆するなんておこがましとは思いますが、気分転換もかねて書かせて頂きました。

プロローグ「人の生み出す世界」

娯楽とは、人の心を満たす物。

つまりは心の食事とも言える大切な物だ。

たとえ戦乱が起こっている世界であろうとも、実際に魔法や超科学が発達した世界であろうとも、平和その物と言える世界であろうとも、本質的にはどの世界の人間も求める物は同じ。

「絶対的な力を持つてみたい」「カッコいい戦士になりたい」「一流の魔術師になつてみたい」

「英雄になりたい」「世界を牛耳る様な悪者になりたい」

「違う性別を演じて見たい」「子供になつてみたい」「大人になつてみたい」

実際に叶える事が難しい夢や理想、そついった願いだ。

現実世界では出来ないのなら、仮想世界でその夢を叶えれば良い。そつして生まれる娯楽『ゲーム』

中には現実と区別が付かないくらい発展した物や、一時の暇つぶし程度にしかないような拙い物まで存在する。

この物語は、本来出会う事が無かった者達の交流の物語。

次元を超え、世界の壁すら越えて邂逅した、仮想世界の英雄譚。

第一話「初めてのぶいあーるえむえむおー」（前書き）

一部人材派遣の閑話からも引用しております。

第一話「初めてのぶいあーるえむえむおー」

” open your world ”

この世界で最もプレイ人口の多い、” VRMMORPG ”と呼ばれるジャンルのオンラインゲーム。

つい半年前まで国同士が争っていたと言うのに、この中で遊ぶプレイヤー達からはそんな陰りが一切感じられなく、もう何年も平穩が続いているかのような平凡な、それでいて少し刺激的な生活が続いている。

そんなこの世界で最初にプレイヤーが訪れる巨大な機械都市に、少々場違いなローブ姿の男が1人。

何をするでもなく、誰かを待っている様でポツンと立ち竝んでいる。

男の名前は” ルシフェル・アーキン ”

現実世界の戦争で、片方の陣営の中枢でその手腕を発揮し、瞬く間に宮廷魔導師の頂点に立った男である。

「しかし、遅いですねリオは」

自分をこのゲームに誘った人物が未だに現れない所為なのか、それとも未知の世界に1人で居る事に不安を感じているのかそんな呟きを漏らす。

ゲームや娯楽と言う物とは縁遠そうなこの男が、何故こんな事になっているかと説明するのなら、話を今から2時間程遡らねばなるまい。

「ふうむ『貴方の分身となるキャラクターを設定して下さい』で
すか……」

「ルシ兄ー早く作っちゃいなよー！ そんなの適当にルシ兄の容
姿いじって作っちゃえばいいんだからさー」

彼は戦争が終わった直後に、面倒事が自分に降りかかる前に辞職、
そのまま行方を眩ませたのであった。

なので彼には当然やるべき仕事などは無く、ただ時間を持て余し
ていた。

そんな彼が暇つぶしを求めている所に、彼の親友の妹である”リ
オ”がこの”open your world”を勧めたのだ。

そして彼は『折角いつもと違う自分に成れるのならば』と、自分
とは縁遠い職業である剣士。

中でも騎士と呼ばれ者達になろうと思っているのだ。

戦争中、常に自分の傍でその身を盾にし戦った者達。

自分に忠義を尽くし、どんな戦場でも付き添った騎士という職に
いつしか憧れを抱くようになっていた。

「リオ、これはどうやって作ればいいんですか？ 私が作るうと
しても醜悪な容姿の大男にしかならないのですが」

「え、ルシ兄どんなイメージでキャラクターを作ろうとしたの？

これプレイヤーのイメージを元にある程度自動で作ってくれるはずだよ？ ルシ兄怪物にでもなりたいの？」

「そんな事はありません！ ただこう、最前線で戦う剣士を想像したつもりですが」

「ルシ兄前衛の皆の事そんな風に思ってたの？ 皆に言いつけちゃうよ？」

「違います、ちょっと待ってください。今イメージを練り直しますから」

勿論、彼が兵士や騎士、傭兵などが皆こんな野蛮そうな外見しているなんて思っている訳ではない。

ただ単に慣れない事に手を出した所為で混乱しただけ、だと思いたいのだが……。

しかし、少々腹黒で天然な彼が、無意識下で一部の脳が筋肉で出来ているような部下に対してそんな事を思っていたとしても不思議ではなかった。

「ふふ、どうですリオ、私のイメージ力も大した物でしょう？ このキャラでプレイする事にします」

そんな彼であつたが今度は上手くイメージ出来た様で、本人も満足げな感想を述べ少々得意そうな顔でリオに自分が生み出したキャラクターを見せびらかす。

「ねえルシ兄、これって前にお兄ちゃんが着てた甲冑じゃない？」

もつとも、そのキャラクターの外見は現実世界に存在する1人の騎士だった訳なのだが。

戦争中、ルシフェルとは別の陣営に就いた親友の姿。

その姿は全身を飾り気の少ない黒い甲冑で覆い、顔までフルフェイスヘルムで隠した騎士だった。

これではキャラクターの容姿などあってないような物だと思うのだが、本人はそんな事をまったく気にしていない様子。

「まあいいでしょう、いかにも騎士って感じしますし、私はこれでプレイしますよ」

「おっけー、じゃあ私も自分の部屋からつながから、一緒にあそぼー」

とまあ、そんな理由で彼はこの世界に降り立った訳なのだ。そして、誘った張本人もようやく合流した模様。

「お待ちせー！ ちょっと移動に手間取っちゃったよ！」

「貴方がリオですか？ 随分と現実世界とは違う姿をしていますね」

彼の前に現れたのは、年のころ20代後半といった所の妙齡の女性。

現実世界の彼女はとう高く見積もっても12・3歳くらいにしか見えない少女なのだが、この世界ではオトナの女として振舞っている様だ。

唯一実際の容姿との共通点と言えば、髪と瞳の色が同じだと言う

事だけ。

空の色を切り取ったかのような鮮やかな水色と、ワインレッドの瞳。

普段はあどけない少女なのだが、この世界ではその深い色の瞳が怪しく輝いて見える。

「ルシ兄はそのまんまだね。まあルシ兄そのまんまでもイケそうだもんね」

「そう、そのまんまなんですよ！ これはどういう事ですリオ、折角作ったあの甲冑は何処に行ってしまったと言っんです？」

そう、彼はと言う訳か折角設定した容姿ではなく、いつも通りの黒の法衣を纏った自分自身の姿でこの世界に降り立っていたのだ。

「あーあれ？ きつとキャラクターの容姿としてじゃなくて、ボーナス装備として登録されちゃったんじゃないかな？」

「ボーナス装備ですか？ なんですかそれは、それを手に入れればあの姿になれるのですか？」

”ボーナス装備”

キャラクター設定で、キャラと共に思い通りに作れる装備一式の事だ。

最初から身に着けているわけではなく、ある程度チュートリアル的なクエストを進める事で手に入れる事が出来るというシステムだ。チュートリアルすら受けずに混乱し、周りのプレイヤーに頼りきりになる事を防ぐ為に生まれたシステムなのだが、物で釣る様で若干導入するのに反発の声が上がったなんて背景があったりする。

「そぞ、ストーリー進めていけば手に入るから、パパッと取っちゃいなよ。ここは現実世界とは流れる時間の早さも違うし、安心し

ていいよ?」

「そういうものなのですか。ではそのストーリーとやらで取ってきますしょう。リオも手伝ってくれますよね?」

「いやーあれって一人用なんだよね。そんなに難しくないと思うから頑張ってみてよ、まあジョブにもよるけどさ。そういえばルシ兄って初期ジョブ何?」

”ジョブ”と言うのは、この世界での自分の職業を表す物で、基本的に自分の戦闘スタイルの事を表す。

初期ジョブはある程度プレイヤー本人の素養で変動する物であるのだが、勿論後から転職する事も可能だ。

「じよ、じようぶですか? たしかに騎士になるなら丈夫であるに越した事は無いですが……」

「そうじゃなくて、今の戦闘職の事! 剣士とか魔法使いとか!」
「ああ、そういう意味でしたか。もっと私にも分かる言葉で言うて下さい。こういうのに疎い事くらい分かっているでしょう?」

まるで横文字に慣れないおじいちゃんのような発言をするルシフェル。

まああながち間違いでもないのだが。

「ちよつと見せてみて。頭の中で『情報開示、対象者リオ』って念じてみて」

「……こうですか?」

すると、彼女の前に表示される文字と数字の羅列。空間に直接展開されるモニターだ。

それをリオは慣れた手付きで操作し、お目当ての項目を表示させたのだが――

「うわ何コレ！ 初期ジョブなのに上位職の魔導師になってる！
それもLvカンストしてるし、格闘家もカンスト一步手前じゃん
！」

「だから、私にも分かるように言って下さい。何となくは理解は
出来ましたが、問題の騎士の方はどうなってるんです？」

ある程度基本的な職業のLvを上げないと開放されない上位職。
それが初期ジョブとして設定されている上に、上限いっぱい
の25Lvと言うのは前代未聞の事件なのだが、ネトゲ事情に疎い彼
にそんな事が理解出来るはずもなく、自分の目的である騎士の事し
か頭に無い様子である。

「サラリと流す様な事じゃないんだけどなあ。でも何だかんだで
私も最初から魔法使いLvカンスト手前だったし、ルシ兄なら納得
かな。剣士じゃなくて、騎士がいいの？」

「ええ、剣士でなく騎士です」

「騎士は上位職だから、基本職の剣士のLvをまず上げなきゃだ
ね。初期Lvは6かー、あと14Lvあげて20にしないと騎士に
なれないよ」

「今すぐにはなれないと言う事ですか？ でしたら先に鎧だけで
も取ってきましようか。まずは形から入る意味も込めて」

「そうだねー、その能力ならあつという間に終わっちゃうと思う
からいつてきなよー」

「了解です。ではまた後ほど会いましょう」

こうして、本人の自覚もなしに物語りは始まりを告げる。
最強の魔導師でありながら、騎士を夢見る転職希望者の物語が。

第二話「第5次統合イベント」

20XX年。

十数年前に確立された、脳への外部装置からのアクセス技術。その技術は当初、医療目的で開発され飛躍的に医学を進歩させた。だが、ある国がその装置を利用し、軍事訓練プログラムを擬似的に体験させる事に成功し、そこから一挙に『バーチャル世界を体感させる』という方向性での開発が進み始めた。

そして遂に、脳に体感させるのではなく『意識を逆にバーチャル世界に飛ばす』と言う方法で自由に好きな世界を作り体験するという事が実現した。

そうになると、今度は黙って居ないのが電子的娯楽の発展速度では他国の追従を許さない日本だ。

その中でもゲーム機器を開発する会社と、ソフトを提供する会社の開発魂に火が点いた。

この技術を利用したゲーム機器やソフトを挙げて開発し、世界中のシェアを瞬く間に掻っ攫ってしまったのだ。

そして、当然その波はオンラインゲーム業界をも飲み込み、VR MMORPGと言う一大ジャンルを築く事となった。

広大なネット世界に、世界中の人間が同時に接続し、その世界で冒険すると言った内容のこのジャンル。

当然人気が出ないはずも無く、またもやソフト会社が挙げて新作を発表すると言う流れになるのは誰もが予想出来た。

だが、余りに乱立されて過ぎて各々の世界の人口がバラつき、次第にサービスを停止せざる終えない事態に陥ってしまった。

しかしそんな時に発表されたある政策が、この事態を急転させる事となった。

『だったら、作品同士を統合してしまえばいい』

こうして始まったゲーム同士の融合。

初めこそ世界観の違いや数値の大きさの違い、プレイスタイルの違い等で大荒れだったのだが、調整に調整を重ね、全てのプレイヤーの要望や意見を吟味、次第に落ち着きを取り戻したのであった。

新たな世界が追加される度に増える人口や新システムや新アイテム。

これが大成功し、瞬く間に人口が増えて行く事となった。

この政策を打ち出した会社が運営するオンラインゲーム”Ext
end my World”は、運営の厳しくなったゲームや合併を望むゲームを次々に取り込み、名前の通り広がり続けている。

『存在している次元が違うだけで、現実世界以上に何でも出来る』と評判の、化け物MMORPGだ。

冒険は勿論の事、国を動かす政治家になったり、科学者となって新しい物を生み出したり。

なんと結婚し、子供を作る事まで出来てしまう、まさにもう一つの現実とも言える世界だ。

そして今回『第5次統合イベント』として、新たな世界を迎える事となった。

「おいヒロ！ 放課後一緒に買い物いかな？ どうせ今日長時間メンテでインできねーし」

「んーいいよー。たしか夕方6時までだっけ？ それまでにPCの前で全裸待機できるなら行ってもいいよー」

「お前全裸待機ってそのネタ、女がリアルで言うもんじゃねーし！」

「女らしさとか、ユキにだけは言われたくないんだけど？」

学校の昼休みの教室で語り合う2人の女子生徒。

ヒロと呼ばれる少々ズレた所のある生徒と、女子としては少し粗暴な口調のユキ。

2人は中学時代からの同級生で、共に“Extend my world”で冒険する仲である。

今日は年に一度の一大イベント『統合』があるので、ネットゲににとっぴりハマっているヒロは少々浮かれ気味だ。

同じくユキも重度のネットゲプレイヤーなのだが、現実世界でも重度の遊び人で、隙あらば現実世界でも遊び歩く自由人なのでそこまですぐにネットゲ中心の思考ではない。

「ま、とりあえず放課後になったら校門の前で待ち合わせな。私は今日部室の掃除やんねーといけなくてさー」

「幽霊部員なんだし、掃除くらい気合いれてやってよねー？ い

「つも2年は私1人で退屈なんだし、たまには顔出してくれればいいのに」

「別に私美術とか興味ないからな」数あわせで入っただけだし。ヒロだっていつも早めに終わってネトゲ三昧じゃん？」

「うっ、それを言われると痛いな」

放課後、校門の前で携帯端末を操作しながら時間を潰すヒロ。

「昔前までは携帯電話と呼ばれていたソレは、今では多機能を通り越して、動くオフィスとまで呼ばれている程だ。」

それを使い、ユキが来るのを待っているようだ。

「わりー遅れた！ 顧問にもっと顔出せって呼び止められてさー。ん、ヒロ何見てんの？」

「災難だったねユキ。今”イーマイ”の公式サイト見てたんだよね」

”イーマイ”と言うのは、Extend my Worldの通称なのだが、世界中の人間がこの日本語的な略称を使っているとい

うのが、若干シユールだ。

「お、今日追加される作品リスト発表されたのかよ！ どれどれ……ゲッ、ストファイも統合されんのかよ！ あそのガチ勢とか人間やめてるだろ絶対！ こりゃ対人アリーナのランキング荒れるだろー」

「だよね。人口こそ少ないけど、あのゲームの観戦してる人って未だに多いもん。残ってるプレイヤーなんて皆有名人ばかりだし」

”ストレンジファイター” 通称ストファイ。

オンライン上でお互いに戦う格闘ゲームで、一世を風靡した作品である。

だが、その余りにシビアな操作性や求められる動体視力、そして現実世界での鍛錬がゲームにも反映されると言う独自のシステムの所為で、人気はあるもののプレイヤー人口が圧倒的に少ない作品だ。

「この現実世界の実力がキャラクターに反映されるってシステムも、少しでも導入されるらしいよ？ 部屋から出ない人とか不利なんじゃない？」

「つつても少しボーナス付くくらいだろー？ あんまかんけーないんじゃない？ 廃人とかのステータスなら」

「それもそつか。他にも結構色んな作品が統合されるみたいだねー。スローライフ系とかも統合されるし、生産職の私としては材料が増えそうで楽しみだなー」

「私はとりあえずダンジョン増えてくれればそれでいいって感じかな。ハクスラ系も統合されるし、結構期待」

2人は互いに統合後の世界がどうなるか想像し合い、新たな要素やまだ見ぬダンジョン、あらたなシステムへの期待に胸を膨らませる。

だが、作品リストを流し見ているヒロの目に、見慣れない作品が飛び込んできた。

「ねえユキ、”open your world”って言うゲーム知ってる？ MMO作品みたいなんだけど」

「世界を作るってか？ 聞いたことねーな私も。どっかの弱小企業が起死回生でも狙って作って、盛大にスベった作品なんじゃねーの」

「かもねー聞いたことないし」

実際、人気ジャンルであるオンラインゲームに手を出し、一気に業績を上げた企業が幾つも存在する。

有名ブランドでも今ではオンラインゲーム上に店を出店したりと、現実世界への広告効果も馬鹿に出来ない。

これも、そんな企業に続こうとした小さな会社が作ったゲームだろう。そう2人は結論付けた。

まさか、これが本来この世界には存在しない、異世界のゲームだとも知らず。

こうして、本来出会う事の無い者同士の出会いが始まろうとしていた。

第三話「これもイベントなんですか？」

自分の作り出した甲冑を求め、一人黙々とストーリーを進めるルシフェル。

最初は買い物の仕方を覚えるための俗に言う”おつかいクエスト”から始まり、街の構造を覚えさせるための観光クエスト、敵との戦い方を覚えさせるための簡単な討伐クエストといった内容だった。

しかし、この世界での戦闘は現実世界の戦闘となんら変わりなく、思うように戦う事が出来る事で気を良くしたルシフェルは、その膨大な魔力や経験をフル活用して片手間で終わらせてしまう。

「何時になったら終わるのですかコレは。早く転職もしたいと言うのに……」

そうぼやきながらも、今完了した討伐の報告へと”ギルド”と呼ばれる施設へと向かう。

そこにいるNPCへと報告を済ませ、次は一体何をやらされるのかと少々疲れた様子でNPCの話に耳を傾ける。

「ルシフェル様の活躍に対して、ギルドより報酬を預かっております。どうぞこちらをお受け取り下さい」

「報酬ですか！？ それは何処にあるのです！」

思わず相手がNPCだという事も忘れて詰め寄るルシフェル。最低限の会話しか出来ないNPCではあるのだが、キチンと言葉の意味を理解し、解説を始める。

「ウィンドウを展開後、依頼状況タブを選択し、達成報酬の項目

を開いてください。受け取りたいアイテムにチェックを済ます事で入手可能です」

親切丁寧なマニュアル通りの回答のおかげで理解したルシフェルは、そのまま項目を操作して装備しようとするのだが――

「装備出来ません……これはどういう事なのでしょう」

今にも泣き出しそうなくらい悲哀たつぷりの声を漏らすルシフェル、しかしNPCは何も答えてはくれない。

だって管轄が違うのだから！

「それは前衛職限定の装備みたいだね。君が転職したら装備可能だよ」

「そうのですか！ あ、これは申し送れました、私はルシフェル・アーキンと申します。宜しければその転職とやらについて伺い……」

背後からの救いの声に導かれ顔を向ける。

リオもどこかへ行ってしまったのかメールを出しても返事が届かず、周りを見回してもプレイヤーの姿が見当たらない。

そんな孤立無援で八方塞な所への声だ、さぞかし嬉しかったのだろう。

だが、振り返った彼は思わず言葉を失う。

「あ、この姿かい？ ちょっと上手くキャラクターを作れなかったんだよ」

「そうなのですか。いや私も最初はうまくいかなかったものです」

声の主は、まるで霧が人の形をとったような姿をしていた。

いくらキャラクターメイキングがうまくいかなかったとは言え、このような姿になるなんて事はありえないのだが、知識の少ないルシフェルにはその判断がつかない。

「ここ、このカウンターで転職出来るんだよ。転職した後はまた君の物語が始まるから、頑張って騎士を目指してね」

「ご親切にどうも、本当に助かりましたよ。周りに人もいませんし、途方にくれていた所で……？」

気が付くと、先ほどまでいた人の形をしたモヤモヤは消えており、また1人NPCだけが轟くギルド内に1人立ちすくむルシフェル。

「とにかく、転職をしましょう。あの方の名前を聞くのを忘れてしまいました。いつかあのモヤモヤさんにお礼を言わなければいけませんね」

余り深く考えもせず、言われるがままに転職カウンターへと向かう。

先ほど「騎士を目指して」などと本来初対面の相手が知りえない情報を持っていた事にも気が付かないまま……。

カウンターに話かけ、程なくしてその場から姿を消すルシフェル。その瞬間、先ほどまでNPCしかいなかった建物に唐突に多数のプレイヤーが転送されて来る。

そして何も無い空間に流れ出す、運営会社からメッセージテロップ。

『本日14時から行われていた臨時メンテナンスでしたが、先ほど無事終了致しました。皆様には多大なご迷惑を――』

「剣士になったと思ったら、今度は知らない荒野ですか。ストーリーはまだ終わらないんですかね？」

突然見慣れない場所へと転送されたルシフェルは、また新しいイベントかと若干うんざりした様子だったが、今の自分の姿をみて表情を明るくする。

「おお！ 騎士甲冑！ ちゃんと着れてるじゃないですか、これで私も剣士の仲間入りですね！」

荒野の真っ只中で1人、漆黒の甲冑を着てはしゃぐその姿はいささか不気味であり、近寄りがたい雰囲気をもし出していたのであった。

「じゃあそろそろ解散って事で！ 私も結構楽しみになってきたしな。んじゃ繋いだら最初の開放された新規エリア前で待ち合わせな」

「りようかい。もう身体をテカテカさせてPC前待機しなきゃ。推奨Lvがわからないけど、なんかなるよね？」

「なんかなるっしょー。いざって時は周りの連中にヘルプコールだせばいいだろうしな」

放課後、一緒に春物の服を物色していたヒロとユキ。

最寄のファーストフード店で食事を取り、メンテ明けまで残り40分を切っていた為お互いに自宅へと戻る事となった。

「しかし、お前それ本当に食うのかよ？」

そして、ヒロはそのファーストフード店にて大量のハンバーガーやポテト等をテイクアウトとして注文し、両手いっぱい抱えている。

「部屋から出なくても良いでしょ？ どうせ親も帰ってこないし、明日は休みだし」

「ほんつとうに廃人一歩手前って感じだな。まあ私の分まで新しい情報仕入れてくれよな」

「おっけ」

もはや籠城戦と言わんばかりのヒロの様子に、若干引きつつ別れるユキ。

尤も、少ししたらオンライン上で再会するわけなのだが。

「ただいま」

誰も居ないと分かっている、つい習慣で声を掛けるヒ口。それとも、それは彼女の無意識下の願望から来る言葉だったのかは分からない。

手を洗い、両手一杯の食料と共に足早に二階の自室へと向かう。端末に表示されている時刻は18時50分。メンテナンスが終わる10分前だった。

PCを付け、頭に装着する少々大げさな装置。

一見すると戦隊物のヒーローが被るヘルメットにも見えるそれが、人の意識をバーチャル世界へと転送する装置だ。

今でこそ簡単に手に入る物だが、開発初期段階で一般人がおいそれと手を出せるような代物ではなかった。

「早く早くー！ ああもう楽しみだぞおこんちくしょー！」

メンテナンス終了まで残り5分。

待ちきれないと思わず声を上げ、装置で隠れていない顔半分をだらしなく歪めるヒ口。

彼女達と彼が出会うまで、あと僅か……。

第四話「邂逅」

多くのプレイヤーが生活する巨大な都市”ライエンシティ”

プレイヤーは基本、ログアウトする時は最寄の街や村に寄り、その宿泊施設でログアウトする。

緊急の場合外でログアウトする事もあるのだが、その場合は24時間以内に再度ログインしないと、キャラクターがフィールドに放置される事となる。

そうになると、悪質なプレイヤーやモンスター、そして悪行を行うNPCに身包みを剥がれてしまう。

なので、基本的に皆街や村でログアウトするのだ。

そんな何万ものプレイヤーの活動拠点とも言える街の広場で大きな声を上げるプレイヤーの姿。

「いざ新世界へ！」

二人の声が重なり、それが大きく響き渡り周りの人間に微笑ましそうにな線を向けられる二人の女性。

片や緑茶色の毛系のセーターの上から皮製のベストをはおり、たふんとした緩やかな曲線を描くバルーンスカートを着た穏やかな顔つき。

亜麻色の髪をゆるく結び、おさげにしているこの人物こそ、この”Extend my World”上でのヒロだ。

キャラクター名はなんの捻りもない現実世界と同じヒロなのだが、本人は特に気にしていない様子。

そしてもう1人は、スレンダーで長身、まるで陸上選手のような

体つきの褐色肌の女性。

アマゾネスを彷彿とさせる高露出の白の軽鎧を着込み、艶のある白髪をなびかせている。

とは言え、黒人特有の彫りの深い造形の顔ではなく、どちらかと言うとヨーロッパ系の作りをしている。

想像の通り、こちらがゲーム上でのユキ、キャラクター名はスノウだ。

「見るよ、手芸部部長のヒロだ。やっぱり新しい素材目当てなんだろうな」

「だよな、滅多に工房から出てこないし。一緒にいるのはいつもの盗賊^{アサン}だよな？」

二人の姿を見て噂話をする複数のプレイヤー達。

この世界でヒロは、少しは名の知れた生産系プレイヤーであった。

生産系プレイヤーと言うのは、冒険やダンジョン攻略、対人戦などの戦いを主と遊び方では無く、豊富に存在する様々な素材を元にアイテムを作り出すプレイヤーの事を指す。

作り出されるアイテムは多岐に渡り、装備品や戦闘用アイテムには留まらず、衣服や食事、家や家電などと、本当に全てを作り出す事が可能だ。

その中でもヒロは、自ら”手芸部”と言うなんの捻りもない名前のギルドを立ち上げ、数十人のメンバーを抱える生産系ギルドのリーダーを努めている。

彼女は基本的に衣服を専門に作るのだが、彼女の作る服は一般のプレイヤーが装備している鎧等の装備品を遥かに越えた性能を持つと言う事で、『強くなりたいたいけど、余り可愛くない格好はしたく

ない』『スマートに強くなりたい』等と言った、あまり仰々しい装備をしたくないというプレイヤー達の間で絶大な人気を誇っている。

そして、そんなヒロがたまに外に出るときは、必ず一緒に行動しているスノウも、いつしか有名になっていた。

「よっし、それじゃあ行こっか！ 今回のニューゲートはディラン砦にあるんだよね？」

「ああ、でもディラン砦周辺の敵って今の私達じゃギリギリ倒せる範囲だから、その先となると苦戦するんじゃないか？」

「大丈夫、部員から戦闘用アイテムたっぷり徴収してきたから」

”ニューゲート”とは、新しく追加されたフィールドへと続く場所の事を指す。

それまで行き止まりや障害物が邪魔で通れない場所が、アップデート後に通れるようになり、新たな世界へと続く扉となるのだ。

そこを潜れば、今まで見えていた景色等の繋がりを無視した光景が広がっていたり、野外のはずがいきなり室内へと繋がっていたりと多種多様だ。

以前、なんの変哲もない村の裏手から、突然おどろおどろしい景色が広がるフィールドへと繋がる等と言った事もあり、ニューゲートを見つけるのは一種の楽しみにもなっている。

今回二人が目指すのは、公式サイトで発表されていた内の一つだ。残りのニューゲートはプレイヤー自らが探さねばならないのだが、今も見つかっていないフィールドが多数存在すると言う。

「それじゃあ皆まで轉移しようぜ、”トラポ”頼むわ」

「トラポくらい自分で覚えなよー。別にそんなにコストかからな

いんだし」

この世界に存在する魔法や技能の殆どは、プレイヤー自らが研究して生み出した物だ。

習得には自分で理解して覚える方法と、完成された技術を買い、それをプレイヤーがレベルアップで蓄積されるポイントを割り振って習得する二つの方法がある。

勿論、ポイントを割り振る方が簡単に習得出来る。

「もったいねーもん。そんなの覚えるくらいなら私は戦闘スキルに振るね」

「そういうの脳筋って言うんだよ」

「うるせー！」

言い合いながらも光に包まれる二人。

足元に展開された魔方阵が徐々に上り、頭を通り過ぎた所で二人の姿が消えてなくなった。

「随分沢山敵が出てきましたね。剣ももってないと言うのに、少

しは遠慮してもらいたいものです！」

荒野の中、黒い甲冑を着込んだ男が何十という狼型のモンスターに取り囲まれている。

先ほどから何匹も彼へと向かい飛び掛っているのだが、すぐさま拳で打ち返されている。

傍から見ると、黒い何かに向かい、小さい黒いなにかが飛び、そしてまた外に飛ぶ黒い何か。

何かの見世物の様にも見える。

「ええい面倒です！ 魔法は使いたくありませんが、これでどうです！」

大地を殴りつけるルシフェル。

”グランウンドバースト”と呼ばれる、大地を破裂させる大魔法。ルシフェルのいた世界では上級魔法とされる部類だが、彼にとつてはワンアクションで発動できてしまう。

本来は長い詠唱を必要とする物なのだが……。

「やつと片付きましたか。沢山お金もおとしているようですし、ありがたく頂いちゃいましょう」

ルシフェルを中心に、まるで隕石でも墜落したかのようなクレーターが出来上がる。

そしてそれを取り囲むように残されたアイテムの数々。

だが、残された物がアイテムだとは分からないルシフェルは、そのアイテムをスルーしてしまう。

そして、そのまま何処か人がいる場所を探して去ろうとしたのだが。

「あ、ああ、あの！ その残していくアイテム、私が貰っちゃってもいいですか！？」

「おい、馬鹿やめろよ！ すみません！ こいつ生産馬鹿で」

「アイテム……この敵の残骸が欲しいのですか？ 必要なのですからどうぞ持っていてくれて構いませんよ、ですが一つ条件が」

ルシフェルの目の前に現れた、二人の女性ヒロとスノウ。

こうして、彼女達はこの一風変わった男と出会った。

第五話「勘違い剣（拳）士」

ニューゲートを潜り、荒野に出た二人は黒い甲冑を着込んだ男と出会う。

一見すると剣士なのだが、拳を主体とした戦闘スタイルから、二人は彼が高レベルの武闘家か、それに順ずる職の猛者だと推理する。新しく追加されたマップの敵はここに至る前のフィールドの敵は一線を画しており、1匹相手にするのも手こずる程だったからだ。

しかし目の前の男は、何十匹も相手取りそれを圧倒してみせた。

「やべえよ、こんな相手に借り作ったりしたら何要求されるか分かったもんじゃねえよ」

「で、でもそんな悪い人に……うう、見えるよお。でもでも！私なら何要求されてもそこそこ作れるよ？」

そんな相手に、ハイエナと呼ばれる行為ギリギリのお願いをしてしまったヒロに、スノウは内心穏やかではない。

もしかしたら、ここで倒されてしまいかもしれないし、無理難題をふっかけられていちゃもんつけられる可能性もあるからだ。

「あの、聞いていますか？ 出来ればどこか人が沢山いる所まで案内してほしいんですけど……」

そんな相手の不安や心配など露知らず、ルシフェルは困り顔で二人の様子を見守っている。尤も、口以外全て覆い隠してしまっている姿ではその表情も読み取れないし、への字型に歪む口が、より一層危機感を煽っている訳なのだが。

彼としては、ようやく出会ったプレイヤーだ。

彼が出会ったあの白いモヤモヤは、どうやらイベント開始の為にNPCだと判断した様だ。

「そ、その条件つてのを言ってみてくれ！　もし無理ならアイテムはいらないから！」

「ちよつとー折角こんなに沢山の毛皮が貰えるんだよ？　チャンスなのに！」

危機感がたりないのか、未だに未練たっぷりで目の前に散らかるアイテムを物欲しそうに見つめるヒロ。

「ええと、ですから、人が沢山いる街などに案内して貰いたいですか……」

「「え？」」

荒野を歩く3人組。

ルシフェルは自分がここに来たばかりで、何をすればいいか見当もつかなく困っているという旨を告げる。

それを二人は

「統合を知らなかったゲームのプレイヤーが、この世界の設定やシステムを聞いているのだろう」

と、ある意味正解で、ある意味不正解でもある解釈をした。

「それじゃアルシフェルさんは、どのゲーム出身なんですか？」

「ええとですね、たしか『ぶいあーるえむえむおーあーるぴーじー』とか言うゲームだったはずです」

「ははは、なんだよそれ、それってゲームのジャンルの話じゃねーか！もしかして初心者なのか？」

「そうですね、初心者です。気が付いたらこんな場所に来ていたんですが、何かのイベントですか？」

二人は今回の統合イベントの概要を話す。

それを聞いたルシフェルも、半分以上は理解できなかったのだが、何か大規模なイベントに遭遇する事となった自分の幸運を喜んでいた。

純粹にゲームを楽しんでいる様だ。

「それにしては随分強かったよなルシフェル。もしかして誰かのキャラクターを借りてたりするのか？」

「いえ、これは私が作ったキャラクターです。先ほどの敵も、私のいた場所と言えば余り強くはなかったのですが」

「へえ〜ルツシーさんは凄い修羅の国から来たんだね〜」

そして広がる誤解。

彼の言う『私のいた場所』とは、即ち異世界の戦場の事だ。しかしヒロはそれを『戦闘特化型の高難易度のゲーム』と受け取った。お互いの認識にズレはあるものの、会話が成立してしまう辺り、なんだかんだと言って異世界とゲーム世界の成り立ちが似ている所為なのかもしれない。

「るつしーですか？ いいですね、よくルシと呼ばれますし、そのニックネーム、気に入りました」

「んじゃ私はルシって呼ばせてもらうぜ？ 私の事はスノウって呼んでくれ」

「じゃあ私の事はヒロってよんでいいよ！」

「そうですか、これから宜しくお願いしますね、お二人とも」

そう言つて、微笑むルシフェル。

異世界において、その戦闘能力や指揮能力、何よりもその容姿で絶大な支持を受けていたルシフェル。

しかし、口以外露出していないヘルムで微笑んでも――

「うへ、お前近くで笑うの禁止！ すっげえキャラだな本当」

「そ、そうだよ。すっごい作りこんでるし」

「そうですか？ 自分でも気に入ってますし、そう言われると悪い気はしませんね」

それでも、当の本人は自分の鎧が褒められたと勘違い。

その後も歩き続け、ようやくディラン砦が見えてきた。しかし、そこで現れる狼型の魔物。

「ちつ後少しだつてのに！ ルシ、手伝ってくれ！」

「了解です。ですが武器が……」

「武器！？ その箆手武器じゃねえのか！？」

「私は剣士ですから、先ほどはしょうがなく殴っていたんですよ！」

すっかり拳闘士や武闘家だと思っていたスノウ。改めてこの男のデタラメさに苦笑いを浮かべてしまう。

一方ヒロは、後ろで何やら手を動かしている。

「じゃあこれあげる！ 木工用のナイフだけど、ないよりはマシでしょ？」

「おお、少し小ぶりですが、剣ですね！」

「いやナイフだろ」

自分にしか見えないメニュー画面を操作し、持っていたナイフを渡す。

そしてそれを嬉々として受け取るルシフェル。

「そではいきますよ！」

「おう！」

「がんばれ」

鎧を着ているとは思えない速度で走るルシフェル。
そしてそのままナイフを握った手で――

「とう！」

殴る。ひたすら殴る。

そして哀れにも悲鳴を上げ飛んでいく狼達。

「どうですか！ 中々！ 強いでしょう!？」

「強いけど、なんか納得いかねえ……」

「ナイフ上げた意味ないじゃ〜ん!」

その言葉で我に返り、今度は刃が刺さるように動き始める。

しかしそれも、裏拳を放つ要領で当てているだけで、正直ナイフの攻撃力ではなく、純粹に衝突の勢いだけで敵を倒しているような物だ。

それでも本人は満足そうなので、よしとする二人だった。

無事狼の群れを退け、お金を山分けする三人。しかしヒロだけは、自分は戦闘に参加していないからと受け取りを拒否し、代わりにドロップしたアイテムを譲り受ける。

「牙も沢山とれたし、ショートソードくらいは作れると思うよ！出来たらルツシーにあげるよ」

「本当ですか！ 嬉しいですねー。やはりこの剣もいいのですが、少し小さすぎましたから」

「だからナイフだって」

無論、本人だってこれがナイフだと言うことは分かっている。しかし折角剣士になったのに、ナイフで戦っていると言う事実を認めたくないらしい。頑なに突っ込みを入れるスノウをスルーしようと頑張ってるようだ。

「ここが、ええとなんでしたっけ？ 砦ですよね」

「ディラン砦だよ。一応ここも中継地点ではあるけど、砦の外には敵が出るから注意してね」

「まあこちらの敵なら私らでもなんとかなるし、ルシならどってことないだろ」

砦に付き、一段落ついた三人は更に深い事情を話し始める。

ルシフェルは、自分の最大の目的である騎士になる詳しい方法を二人に尋ねた。

「上級職とはちょっと違うぞ？ 騎士にはそのままなれるはずだ。剣士を上げて開放される職業なんて無かったはずだ」

「そうだったんですか？ 知人にはそう教えられたのですが」

「それって前にいたゲームの話だと思うよ。ここだとすぐに騎士になれるから、街に戻ったら転職してみるといいよ」

「あ、そうそう。ルシ随分強いけど、他になんか職業上げてたりすんの？ 今いくつよ」

「たしか、魔導師が255で格闘家が249でした」

「へえ、意外だな魔導師の方が高いなんて。格闘家に転向したのはやっぱり複合職かなんかの為なのか？」

「いや、そういうわけではないのですが」

今ルシフェルが答えたレベルは、あくまで”open your world”での数値であり、この世界に來た段階で数値が修正されている。

その事を知らずにそのまま答えた為余り驚かれはしなかった。

この世界での職業レベルの上限は1000であり、今ステータスを確認すれば魔導師は1000レベル、格闘家もそれに準じた高レベルになっているのだが、その事は本人すら気がついていない。

仮に気が付いたとしても、「何やら数字が変わってる」程度にしか受け取らないのだろうが。

「補正目的って事でしょ？ 職業変えても上げた能力が影響するってシステムとかよくあるし。打たれ強い魔道師なんて結構渋いチヨイスだねルツシー」

「なーる。だから拳で戦ってたのか。騎士になったら剣以外の武器にもシステム補助がかかるし、もっと戦いの幅が増えると思うぜ？」

「……………とりあえず、騎士になればもっと強くなれるんですね」

思案顔で、自分が理解出来た事だけを確認する辺り、やはり彼は少し難しい話だった様だ。

ちなみにシステム補助と言うのは、特定の職のプレイヤーが特定の武器を持ったときに受ける事が出来る恩恵だ。

そのお陰で、現実世界では剣なんて持ったことの無い人間でも、自由自在に剣を扱う事で出来たりとゲームとして成り立っているのだ。

無論、現実世界で魔法なんて存在しないのだし、魔法関係の職業は皆このシステムの恩恵を受けている。

既に高Lvまで魔法職を上げた人間は、転職後も魔法を扱う事も出来るが、その効果は微々たる物だ。

戦いに関しては、恐らくこの世界の誰よりも精通しているだろうプレイヤーでありながら、何も知らない初心者としてこれからこの世界で生活で生活する事になるルシフェル。

未だ自分の身に何が起きたか理解できていないが、それでもこの世界を堪能する事となるだろう。

第六話「騎士の中身はなんじゃろな？」（前書き）

久しぶりの更新となります。

第六話「騎士の中身はなんじゃろな？」

「凄いですね、これ全部プレイヤーなのですか？」

「うん、そうだよルツシー。ショップの店員も、街の警備員も殆どプレイヤーだよ」

すぐに騎士になれると聞いたルシフェルは、街へと戻るなりすぐに転職受け付けへと案内を頼んだのだが、街中を歩く大勢の人や、露天商や警備員、さらには城の様な巨大な建物の門番に至るまで全てプレイヤーだと言う事に驚きを隠せないでいた。

まさに「何でも出来る」である。実際この街に存在するNPCは、システムに深く関わる手続きを行う場所にしか存在していない。

今向かっている転職受け付けも、その数少ないNPCが存在する施設だった。

「やっぱりルツシー目立ってるね。騎士鎧とか人気があるんだけど、そこまでディテールに拘ってる装備を作れる人なんて滅多にいないもん。ルツシーがやってたゲームって中世物なの？」

「どうでしょうか？ ある程度自由に作れたので、とくにそういった物はなかったと思います」

「そっかー、じゃあそれはルツシーの趣味って事なんだ」

「ええ、騎士に憧れていたものでして」

尤も、視線が集中する理由はその見慣れない格好の所為だけではなく、隣にいるヒロの影響でもある。

道行く人々の大半は、ルシフェルの着ている鎧を、ヒロ率いるクリエーターチームの最新作だと思い込んでいるのだ。

実際、チーム内にはこういった甲冑などの趣味装備を専門に作る人物もいるのだが、余りの人気に生産が追いつかず、品薄状態が続

いている。

なので、当然ルシフェルの着ている漆黒の甲冑は目を引くのだ。

「ここ、ここで転職するんだよ！ 騎士の他にも、上位職で聖騎士パラディンとか暗黒騎士とか、ちよつとマイナーだけど精霊騎士とかあるんだ。エレメンタルナイトルツシーの見た目だと、暗黒騎士とかピツタリじゃない？」

「そんなに種類があるのですか！ これは、迷ってしまいますね。ですが、とりあえず今は騎士になりましょう」

カウンターへと向かい、NPCの指示に従い手続きを進めていく。ある種イレギュラーである存在のルシフェルだが、特に何も問題なく転職を済ませる事が出来た。

自分の最大の目的である、騎士になる事が出来たルシフェルだが、勿論そこで満足してしまうような単純な性格はしていなかった。

「では、今から私は仲間を守る、騎士として活躍しましょう！ というわけで、私を仲間にして下さい」

「いいよー。私のギルド、外に採取に行く時は他のギルドとかに依頼したり掲示板で募集とかしてたんだよね。専属の護衛が出来るなら大歓迎だよ」

「護衛、なんと素晴らしい響きなんでしょう。これは、騎士のレベル？ レベルであっていますよね？ それを上げなければいけませんね」

「あ、そつか。１レベルからだったねー。じゃあ暫く私達に付いてきてレベル上げでもする？」

「大丈夫です、たとえ未熟な騎士と言えど、後れを取ったりはしませんよ」

ルシフェルはそう言うが、実際この世界で物を言うのはレベルによる能力の底上げだ。

たしかに本人自身の反射神経や運動神経に左右される要素も多々あるのだが、それだけでどうこう出来る物ではない。

そう、統合前まではそうだった。

しかし、『現実世界での鍛錬が反映される』と言う、大多数には余り恩恵のないこの追加された仕様が、彼に味方する事となる。

そもそも、運動神経や動体視力だって、平和な世界に生きるこのゲームのプレイヤーとは比べ物にならないのだ。

何よりも、身体そのものの作りが違う。さすがは異世界人と言った所か。

「そう？ でも装備だけはキチンと整えてね。ギルドに戻ったら、何か適当に見繕ってあげるよ、さっきのモンスターの素材のお礼もかねてさ」

「何から何までお世話になります。いずれ、相応の働きでご恩をお返ししますからね」

「ルツシー堅いよー。もつと気楽にね？」

帰りもやはり道行く人の視線に晒されたのだが、当の本人達はそれに気づくことなく、そのまま自分達のホームへと戻っていく。

案外、この二人は似た物同士なのかもしれない。

「ここ、ここが私のギルド『手芸部』の部室だよ」

「なるほど。ここが私が使える方々の住まう場所なのですね」

チーム、またはギルドやクランと呼ばれる、ユーザーが自分で作る組織が運営に申請して与えられる拠点。

通称『ホーム』と呼ぶのだが、ヒ口は部活という形に拘っている

のか部室と呼ぶ。

とは言え、そこは教室などといった部屋ではなく、立派な一軒家であるのだが。

「ここは招待されたプレイヤーが許可証を持っているプレイヤー、それと部員しか入れないんだ」

「では、私は部員として、という事ですか？」

「ううん、スノウと一緒に、許可証を持ったプレイヤー扱いかな。

一応生産職限定って事にしてるからさ」

「なるほど、では客将扱いですね！」

西洋的な外見の騎士が、己を客将と評するのに違和感を感じるが、本人はそんな事を気にする様子もなく、またヒロもそんな言葉など知らない為、「またこの人おかしな事言ってる」程度にしか思っていないかったりする。

「ただいまー！ みんな、私のお客さんつれて来たんだけど、いいかな？」

「おかえりなさい部長。スノウさんは今日は一旦落ちると言っただけで、ログアウトした所です。と言う事は、お客さんはスノウさんではないんですね？」

「ありゃ、そうなんだ。それに部員もリコちゃんしかいないの？」

リコと呼ばれた、オレンジの鮮やかなショートボブの少女がスノウの不在を伝える。

そして、ヒロがこれまで連れて来る客は大抵がスノウだった為にこの質問だ。

それにしても、微妙に会話が噛み合っていないところがヒロのマイペースさを物語っているようだ。

リコもそんな部長に内心呆れつつも、いつもの事だからしょうがないと質問の答えを返す。

「皆、新エリアの探索に向かっています。新しい素材欲しさでしょうね。私に言わせれば、市場に出回るのを大人しく待てばいいと思います」

「んーリコちゃん相変わらず現実的。自分で素材を探すのだって、イーマイの醍醐味なの」

「そこは、人それぞれです。私は効率よく作品を作る為に最善の選択をしてるつもりですから。それよりも、そちらがお客様……ですか？」

少し警戒した様な、怪訝そうな顔で入り口の外に佇むルシフェルに視線を送るリコ。

彼女がこんな反応をするのも無理はない。ここ手芸部は、全員女性プレイヤーで構成されており、また、部員が連れて来る友人も、皆女性だったからだ。

当然、依頼は老若男女から隔たり無く来るのだが、実際にここまで訪れるプレイヤーは一握りだ。

故に、いかにも怖そうな黒甲冑を身に纏い、男性だと一目で分かるルシフェルを警戒するのは無理もない事だった。

「この人はルツシーさん。私とスノウが新エリアの荒野に行ったときに知り合ったの。凄く強くて、新素材もいっぱいもらっちゃったんだ」

「……それで、その人を連れてきた理由はなんでしょう？ 何かご依頼ですか？」

「うん、ルツシー強いんだけど、統合の事もよく分からないみたいで色々教えてたんだ。暫くウチの専属護衛として働いて貰おうと思ってる」

「そうなんですか。専属……ではここに自由に出入り出来るようにするという事ですか？」

ヒロとしては、さほど問題もないと思っ たルシフェルへの部室への入室許可。

しかし、リコからすればそういうわけにもいかない。

男が存在しないからこそその居心地のよさ、と言うものだってあるのだ。

「これは、さすがに部長の一存で決められる事ではないのでは？」

「あ、それもそうかも！　じゃあ、この件は後日改めてって事で、

一先ず今日だけお客として入れてもいいかな？」

「それでしたら……」

一方扉の外で待機していたルシフェルは、このリコと呼ばれる少女の言わんとしている事を曲解していた。

（なるほど、中途半端な実力の者を身内に抱えるのを良しとしないのでしよう。彼女はここの参謀の様な役割をしているのでしようね。此方を探らんとするあの眼差し、ここは少しずつ、実績を上げて信用を勝ち取るしかないでしょう！）

こんな具合である。

「ルツシー入っていいよー。あ、この中一応容姿設定のフィルターオンにしてるから、鎧を脱ぐ時は気をつけてね？」

「フィルター……？　よくわかりませんが、鎧をはずさなければいいんですね？」

このフィルターは、ネット上でのトラブルを回避する為に導入さ

れたシステムだ。

設定は任意なのだが、これをオンにすると、現実世界から著しく離れた容姿の場合はリセットされて表示されるのだ。

入団に性別が関わるギルドや、取引や市場など、一部の施設ではこれを導入しているプレイヤーも多い。

俗に言うネカマや、容姿設定による成りすまし。それを利用した詐欺などのトラブルを防ぐ為のシステム。

当然、この導入に否定の声を上げた大勢のプレイヤーも存在するが、そこは住み分けが出来るよう、導入の強制をしなかった事で納得させたという経緯が存在する。

「それじゃルシフェルさんから頂いた素材の一部を頂戴しますね」

「おっけい。早速これから布とか糸をつくってみよっかー」

「ではその間、私はお茶でもお入れしましょう」

早速戦利品をテーブルに並べ、自分の使う分を掴み取る。

毛皮などは本来臭いや汚れなどあるのだが、そういった都合の悪い部分は再現されていない。

また、なめす作業や毛糸の紡ぎなども簡略化され、ある種のミニゲーム的な感覚で作品を作る事が出来るのだ。

とは言え、その辺りの完成度は本人の美的センスや手先の起用さ、それに経験が物を言うのだが。

「わーすごい！ 見てよりコちゃん、この糸ナイロンタイプだよ！
それもこんなに沢山とれる！」

「こちらも、簡単な毛皮の布地を作ってみました。この短時間で
作った割には破格の性能ですね。一体何レベルの魔物だったんです
か？」

早速お互いに簡単な物を実験的に作り出し、その品質の高さに喜
びの声を上げる。

素材の品質は、当然落とした魔物の種類が関わってくるが、その
固体の能力、即ちレベルも大きく関わってくる。

たとえば、レベルの低い魔物の毛皮は、柔らかく加工がしやすか
ったり、逆に高いレベルの物は、硬すぎて加工が難しく、逆に価値
が下がってしまう等。

「たしか400前後だったかな？ 私とスノウだとちょっと苦戦す
る相手だったけど、ルツシーがもうね、ちぎっては投げちぎっては
投げて感じてね！」

「それは凄いですね。この街の近辺で活動してるプレイヤーでは苦
戦は必須。中々意地悪な場所に意地悪な新モンスターを配置してき
ますね」

活動拠点となる、大型の街にはそれぞれ推奨レベルが存在する。

付近のダンジョンの難易度や、その街で受けることが出来るクエ
ストの難易度によってそれは変わるのだ。

ここ、ライエンシティは中堅プレイヤーの主な活動拠点であり、
そこそこのめり込んだ者、ある程度戦える力を入れたら自由に
暮らしたい。そんなプレイヤーが多く活動する街だ。

当然、攻略や冒険、対人戦などゲーム色の強い遊び方をするプレ

イヤーが活動する街もあれば、逆に新規プレイヤーの活動する、どこかで平和な街も存在するのだ。

強さ的には、その最前線の街で活動しても問題ないルシフェルの魔道師レベルと格闘家レベル。

だが、騎士クラスになった事によってそのレベルは一気に1となり、他の職業を上げた事からの恩恵を受けることが出来ても、とてもじゃないがここで活動するには心もとない状態だ。

とは言え、本人はそんな事情も知らないし、実際に戦闘になっても何の心配もないのだが。

「お二人とも、お茶が入りましたよ。勝手に備品を使わせて貰いましたが、よろしかったでしょうか？」

「あ、ルツシーありがと！ って鎧のまんまよく入れられたね」

「どうも。随分と器用なんですね。ガントレットくらいなら外しても問題ないと思いますが」

「そうですか？ たしかにこれでは音も立ててしまいますし、行儀が悪いですね」

その言葉を聞き、ある程度なら外しても問題ないのだと判断したルシフェルは籠手を外す。

そして、トレーにのせたカップを配っていく。

そして――

「では、私も頂きますね」

さすがに、飲食の時までヘルムを被るのは行儀が悪いと、ルシフェルはその手で頭を掴み、上へとズラしていく。

そして、好奇心からか二人もその様子をチラチラと覗いている。

フィルターのある場所で、平然と素顔を晒すルシフェルに、リコ

も思わず興味が沸いてしまう。

ヒロもまた、この不思議な騎士が一体どんな人物なのか、ワクワクと言った心持で視線を向ける。

「ふう、兜だけでも別な物にかえてもいいかもしれませんね」

汗などはかかないこの世界ではあるが、それでも顔覆う圧迫感や五感の鈍り。

甲冑を着る喜びでそれらを余り感じてはいなかったものの、さすがに数時間ぶりに脱いだ爽快感に、思わずそんな提案をしてしまっていた。

「おや、二人ともどうしたのです？　もしかして、お茶の入れ方を間違っていたでしょうか？」

ここで、もう一度言うが。

彼は自分の世界で、一躍有名になった背景には、その類まれなる戦闘能力や指揮能力。

そして、人を引き付ける容姿があったと言う事を。

故に、そんな異世界の戦争や、日本人ばなれした外見をした人間との接点の少ない二人は――

（うわ、なんか凄い人拾ってきちゃったみたい！）

（部長、また凄い人を捕まえてきましたね）

致し方が無い事である。

第六話「騎士の中身はなんじゃろな？」（後書き）

実際、画面の向こうでしか見る事のない西洋人の完成された容姿を
間近で見た時、思わず圧倒された事があります。

第七話「異変」

「は……？　どうなってんだよこれ……」

ヒロヤルシフェルが部屋でくつろいでいたのと同時刻。

ユキは先にログアウトし、現実世界での用事の為に支度を整えていた。

だが、彼女は自分の周りの奇妙な出来事に不安になり、パソコンを使ってその事について調べていた。

「イーマイにログインしていた人間だけ、逆浦島太郎状態……？」

彼女が体験した、奇妙な出来事。

それは、イーマイに二時間程ログインしていたのにも関わらず、現実世界では時間が殆ど経過していないという物。

そろそろ弟の帰宅時間だろうと、夕食の支度をしようとログアウトしたのだが、時計を見ると時刻は6時12分。

そんな筈はないと自分の携帯端末や、PC上に表示されている現在時刻。更にはインターネットに接続して、国際時計から正確な時間を調べ上げたものの結果は変わらず。

そしてこの事についてヒロに伝えようと、ログインの為に公式サイトへとアクセスし、念のためメンテナンス情報を確認した所、公式BBSに先ほどの言葉『逆浦島太郎』と言う単語が踊っていたのだ。

「現実世界の10倍の速度……？　なんでそんな事になってんだよ！」

ログアウトしてから既に10分以上経過している。

だとすれば、イーマイの中ではすでに100分。即ち一時間半以上も経っている計算だ。

「急いで、知らせるべきだろ？ 何ビビってんだよ……！」

ダイブマシーンへと伸びた手が、僅かに震えていた。

未知の現象が起きている場所へと、再び自分の意思で向かうのだ。彼女が躊躇するのは当然だ。ましてや、まだ17歳の少女なのだ。ただの女子高生にそこまでの勇気を求めるのは余りに無茶だ。

「あ、外からメッセージ送ればいいのか。これなら……」

ログイン中のプレイヤーに、外部からメールを送るという事も可能であり、そんなすぐに思いつくはずの事ですら、気が動転して思いつかなかったユキ。

打ちなれているのか、片手で器用に携帯端末のキーを押し、あっという間に文面を完成させる。

「これで、すぐログアウトしてくれよ……」

祈るように、自分の端末を握り締める。

まだ何か実害が出たで訳でもないが、それでもユキは親友の無事を祈る、だが――

「送信エラー………なんでだよ！？ くそ、もう一回」

その後、幾度と無く試したものの、何れもメールが届く事は無く、念のためにと他のログインしている相手にも送った物の結果は変わらず。

現在ログインしているプレイヤーにだけ、一切のメールが届かないという結果に終わった。

「また、入るしかないってのかよ……」

ゴクリとつばを飲み込み、マシーンを装着する。

もしかしたら、創作の世界の様に現実世界に戻ってこれなくなるかもしれない。

何か身体に異常をきたすかもしれない。

そんな恐怖を押し殺し、再び彼女はログインする。自分の大切な友達に異変を知らせる為に。

「この牙が、剣に変わるんですか？」

「そだよ、これをインゴットに変換して、そこから職人が武器にするの。私も一応作れるんだけど、部員に武器専門の職人がいるから、その子が戻ったら頼んであげるね」

一方、そんな異常事態に陥っているなど露とも知らず、平和そのものの手芸部部室。

ルシフェルの容姿に思わず後ずさり構えていた二人だったが、そこはさすがにマイペースなヒロ。

『うわールッシーいつけめーん！』なんて軽く受け流し、これまでと変わらない態度で接していた。

だが一方、常人というべきか、一般的な感性の持ち主であり、常識人を通っているリコはというと。

「あ、あの……その、とりあえず、皆が戻ってくるまでに、どんな武器がいいか決めると言うのは、どうです、か？」

完全に、しどろもどろになってしまっていた。

「たしかにそうですね。出来れば、両手で扱うような剣がいいのですが、私では難しいかもしれませんね」

「そうだね、ナイフすら満足に使えてなかったもんねー」

「そう、なんですか？ 剣を使えないのに、そんな格好をしているなんて」

元々彼は魔術師であり、もしもの時の為にと肉弾戦もそつなくこなす事が出来るが、そのスタイルは杖で相手を殴るという、どちらかと言うと棒術の様な物だ。

なので、剣の様に特定の方向に正確に振る下ろす、なんて事を意識して戦った事の無いルシフェルに、剣を使わせるというのは至難の業だった。

とは言え、騎士になった事によるシステム補助があるのだし、あの程度は使えるようになってる筈なのだが。

「しかし、やはり騎士は騎士剣を使ってこそと思うんですね。練

習するべきでしょうか……」

「でしたら、これ使ってみますか？」

手をかざし、自分にだけ見えているウィンドウを操作するリコ。

やがて手の上に現れる、一振りの両手剣。

彼女は生粋の生産系プレイヤーであり、戦闘スキルや職レベルなどは殆ど上がっていない街中からあまり出ないプレイヤーではあるが、それでも装備品は一流の物を取り揃えている。

とは言え、大半はステータス不足で装備出来ないのだが。

「少々お借りしますね、有り難う御座います」

「ひえ！ い、いえどう致しまして！」

満面の笑顔を浮かべ、相手の手に触れるか触れないかぎりぎりまで手を差し伸ばすルシフェル。

やはり、まだ彼女は慣れないようだ。

「そんなに重くないんですね。ちょっと振ってみても？」

「いいよー周りに気をつけてね」

ニコニコと二人の様子を眺めていたヒロの許しも得て、早速素振りを始める。

だが、システム補助利いているとは言え、その振りは常人とは思えない程にブレない見事な物だった。

振りだけは。

「ル、ルシフェルさん、あの、それでは剣の腹で相手を殴る事になつてしまいますよ？」

「はて、おかしいですね？ もう一度」

それでも、振ってるうちに徐々におかしくなっていく。

ただ上下にふっているだけならばこつはならないが、まるでそこに敵がいるかの様に、見よう見まねの動きを繰り返すうちに、そうなってしまうのだ。

「……難しい物ですね。やはり、騎士への道は遠いと言う事ですね！」

「え、ええ。そうですね？」

「ルツシーむいてなーい！」

そう、早い話が向いていないというだけである。

人には、絶対に上手いかない事の二つや二つある物だ。

どんなに練習しても、人並みにすら出来ない事が。

それがルシフェルの場合、剣を扱う事だっただけ。

「向いて……いない？ し、しかし剣で戦ってる事に違いはないでしょう！？ そうですよ、ね、リコさん！」

「え、まあそうですね。でも、たしかにこれでは鉄の棒で叩いてるのと変わらないかも……」

その端正な顔を歪め、泣きそうになりながら同意を求めた相手にまでそんな事を言われてしまい、思わずその場に崩れ落ちてしまうルシフェル。

彼にとっては、剣が全てだったのだろう。

「ええと、騎士が全員剣を使うという認識が、間違っているとも思っています。ええとですね、ほら、門番や近衛兵は槍を持ったりしていますし」

「それもそうだね、剣だけが騎士の武器ってわけじゃないんだし、元気だしなよ」

「うつ、ですが……」

それでも、憧れの騎士像が崩れたのには違いな彼にとっては、その慰めも余り効果が出ていない様子。

だが、彼の適正からすれば槍の方が遙かに向いているのだが。

「ほ、ほらほら、これみて下さいルシフェルさん。アリーナのチャンピオンも槍使いなんですよ！ この人は聖騎士ですが、同じ騎士の仲間です」

「あ、その人見たことあるー！ たしか今リツくんがこの人の為に騎士鎧作ってるんだよね、白銀の奴」

少しでも元氣付けようと、アリーナと呼ばれる対人戦をする為の施設で、現在最強と言われている槍使いの姿を見せる。

全身を包む甲冑ではないが、金属のグリーブやガントレット、それに煌くブレストアーマーを装着するその姿は、紛れも無い騎士そのものだった。

そして、そんな姿を見たルシフェルはと言うと。

「私は杖で棒術を使う事が出来ます。本来私には槍こそが尤も向いていると言っても過言ではないのです。騎士ならば、槍を使ってこそと言う物です」

「立ち直り早いね、そんなにこのチャンピオンがかつこよかった？」

「私もいつか、この方の様に栄光を掴み取って見せましょう！ そうと決まれば、是非槍を手に入れなければいけませんね」

すっかり立ち直り、騎士は剣を使ってこそ、なんて意見をあつさり下げ、槍こそ騎士の武器だと新たな持論を展開しはじめる。

これではただのミーハーである。

「それでは、この剣はお返し致しますね。有り難う御座いました」
「いえ、気にしないで下さい」

剣への執着をあつさり捨て、何事もなかったかの様に返却する。
その転身の早さに、さすがのリコも笑いを堪えている。

「じゃあ、レベルも1だしそこまで強いのは装備できないだろうから、性能抑えたの作ってくれるように頼んでおくね」

「お任せします。私それまで、適当な物を見繕って修行の旅に出てきますから！」

「大丈夫？ この街じゃ近くでもレベル1で勝てる相手なんていないと思うけど」

「心配はいりません、敗北もまた糧となりましょう。とは言え、負けるつもりなどありませんけどね？」

止めても無駄だろうと、苦笑いを浮かべながら見送る事にした二人。

「現実の厳しさを体験するのも、勉強だ」なんて思っているのだろう。

実際、このゲームのデスペナルティは修得経験値の半減という物なのだが、それは現在の職業レベルに必要な経験値なのでレベル1のルシフェルには関係ない事だった。

それ故の放任だ。

「じゃあさっきの転職受け付けの近くに武器屋の露天があったから、安いの1本買ってみるといいよ」。さっき倒したモンスター、お金落としてたでしょ？ それで買えると思うよ」

「了解しました。それでは行ってきます」

意気揚々と外へと出て行ったルシフェルを見送り、二人は「ふう」とため息を吐く。

「部長、あの人大丈夫なんですか……その、色々な意味で」

「うーん、面白いけど、ちょっと心配かな？」

「たしかに、見てて面白いですし目の保養にも——あ！」

「どしたのりこちゃん？」

突然、何かにきがついたりこが大きな声を上げる。

彼女の視線を追うと、そこには——

「あ、ルッシー兜忘れてる」

「ま、まあ外でしたら素顔だと気がつく人はいないと思います……よ？」

「くっそ、拠点も遠いし人も多くて思うように走れねえ……」

街の中央や主要施設にある、ログインしたプレイヤーが最初に訪れる地点。

ギルドメンバーではないスノウは、拠点内でログアウトしても再度ログインした時はまた自力で拠点まで移動しなければならない。

最も拠点に近いスタートポイントである転職受け付け前から、彼女は急いで拠点へと向かう。

が、統合したての、それも異変の所為で実質メンテ明けと殆ど変わらない時間の街の中は、文字通りすし詰め状態で思うように移動出来ないでいた。

「つてえ！ わりい！ 急いでたんだ」

「いえいえ、此方こそ身動きがとれず、邪魔をしてしまったようですね」

お互いに尻餅をつき、相手の顔だけ確認して謝罪の言葉を互い述べる。

「じゃあ私は急いであるからこれで！」

「はい、またご縁があれば……はて？ 今のは」

（さっきのキャラ、すっげえ美形キャラだったな。職人にテクスチャ製作依頼でも出したのか？）

彼女はひたすら縫う様に人込みの中を走る。

尤も、ゲーム内では通常通りメールを使う事が出来るのだが、そこまで頭が回っていない様子。

しかし、それも無理のない事だろう。

こんな、ありえない現象が降りかかっているのだから。

第七話「異変」(後書き)

デスゲームと呼ばれる物にする予定はありません。

第八話「黒き槍騎士」

初心者が最初に降り立つ拠点の街から、幾多の困難を乗り越えた先に広がる山岳地帯。

草木も少なくゴツゴツした岩場が続き、その先にはプレイヤーを待ち受ける険しい山々が広がっている。

その山を抜けた先に、ルシフェルの今いる街、ライエンシティがあるのだ。

中堅プレイヤーとしての実力を持っているか試されるこのフィールドの名前は”ガルダー山脈”

ビギナーに分類されるプレイヤーが、より高みへと至るための最後の難関である。

その山を挟み、反対側の多少緑の姿が見えるようになってきた荒野にルシフェルは居た。

「刺すだけならばさほど難しくはありませんね。とう！」

槍を巧みに操り、襲い掛かるモンスターの群を一騎当千の如く相手取る。

モンスターの中には、レベルの低い相手を優先的に狙うと言う思考ルーチンを組まれた物も多く、ここライエンシティ南口周辺は、中堅プレイヤーとそれ以下のプレイヤーを分ける、一種のふるいの様なモンスターの巣窟なのだ。

当然、騎士レベル1のルシフェルは絶好の的だ。

それまで他のプレイヤーを襲っていたモンスターも、次第に彼へ

と殺到してきたのである。

「なんかわからないけど、ラッキー！」

「今のうちに街へ急ぐぞ！」

「あの人がタゲ取ってくれてるみたい、今のうちに駆け抜けるよ！」

この様に、街まであと一歩の所まで来ていたプレイヤーもこぞつて街へと向かうのであった。

（ふふふ、まるで救世主の様ではありませんか！ 皆こっちにお礼を言ってるようですし、このままここは私が引き受けましょう！」

ハーピーと呼ばれる鳥人のモンスターに、トカゲを模した肌を持つ人型のモンスター！。

この辺りで最後の難関と言われている、初心者殺しの双壁として語られる相手。

ライエンシティ周辺の推奨レベル200より少し低い、170レベルの相手だ。

それが、集まるに集まって大群となっている。

だが、等のルシフェルはそんな普通のプレイヤーなら絶望しかない状況なのに、楽しそうに槍の使い勝手を試している。

もう一度言うが、彼はまだ初期レベルなのだ。いくら他職からの補正があるとはいえ、本来ならば手も足も出ない、一方的に狩られるだけの立場なのだ。

「ラウンドスレイ！」

腰を支点に、槍を大きく回転させなぎ払う。

遠心力と、技に宿るエネルギーが周囲の敵を一掃する。

彼の世界での技や魔法は、ここではスキルとして認識され、キチンと技として発動していた。

「私でも使えるみたいですね。やはり好奇心で訓練に混じった甲斐があったようです」

槍を問題なく使いこなす己に、彼はさらにテンションを上げる。嬉々として己の技を試していく。

そして、彼の視界の隅に表示されているウィンドウには――

『騎士レベル71に上がりました。スキルポイント+10獲得し――
騎士レベル72に上がりました。スキルポイ――騎士レベル73
に上がりました――』

文字が流れきる前に、またレベルがあがる。

自分のレベルより著しく離れてる場合、修得できる経験値は大きく下げられる物なのだが、それでも100以上離れてる相手から得られる経験値はそれなりに高い物。

そして、上がるに連れ補正が緩くなっていく。

（段々と調子が上がってきましたね！ やはり槍が私に合っているのでしょうか。この槍を選んで正解ですね！）

身体の動きのキレがさらに増し、疲労が蓄積しては消え、さらに一撃の重みが増していく様に、自分にはやはり槍が相応しいのだと

実感を強め、満悦のルシフェル。

実際には、レベルアップの恩恵であるステータスアップのお陰なのだが。

そして、使われる事なく蓄積しているスキルポイント達……。

そのポイントをステータスに振るなり、修得している技能に振ればさらに効率よく強くなれるのだが、彼はレベルアップにすら気が付いていない。

彼からすれば、人がそう簡単に成長するなんて事はないのだ。

これが認識の違い、ゲームに疎い人間の思考っ！

早く誰か彼に教えてあげて欲しい。何れポイントがカンストして無駄になる前に……。

次第にモンスターの数も減り、辺りには大量にドロップしたゲーム内通貨と素材。

さらには、レアドロップに分類される装備品の数々。

だが、彼はその戦利品には目もくれず、最後の難敵とも言える相手と対峙していた。

「すごいですね、まさか幻想種に分類される相手と戦えるとは！
いやはや、ゲームとは凄い物ですねっ！」

彼の前の前に降り立つ、王者の風格漂わす巨体。

イーマイには、特定の条件をそろえた時のみにその姿を現す、通常では遭遇する事の出来ないモンスターが多数存在する。

通称『ミスティックシンボル』

彼の目の前に降り立ったのは、誰が見ても同じ答えを出すであろう姿をしていた。

強靱な刃を思わせる、鋭い切っ先の様な鱗を全身に纏い、そして空を統べる事を体言しているかの様な巨大な翼。

爬虫類特有の眼に激しい怒りの炎を称え、口からはその怒りがあふれ出しているかのようにチロチロとオレンジの光が漏れ出ている。

そう、まさしくその姿は――

「ドラゴンに挑むなんて、何百年ぶりでしょうか！」

そう、ドラゴンだった。

ここで、何故こんなモンスターが現れたのか説明すると、それはルシフェルが短時間で大量に倒したモンスターが関係する。

竜種に分類されるリザードマンと、空に属するハーピィ。この二種類の敵を一定数倒す事により、初めて現れるのがこのドラゴンだ。差し詰め、己の眷属を滅ぼされ、その仇を討たんとする様に。

とは言え、本来なら多数のプレイヤーが協力して効率よく狙いのモンスターを討伐し続けないといけないいけないこの条件を、一人で達成してしまうのだから末恐ろしい。

そして、突然街の近くにドラゴンが現れたことにより、街の周辺は混乱に陥っているのだ。

「突然現れた強大な敵に逃げ惑う人々をその背に背負い、一人立ち向かうっ！　これが……騎士！」

が、その混乱の元凶であるルシフェルは、このシチエーションに酔い一人歓喜に震えているのであった。

一方、人込みを掻き分け漸くたどり着いたスノウは、ヒロに事の端末を説明していた。

バーチャルとは言え、その精神的な疲労から息も絶え絶えだったスノウに、リコモヒロも何事かと構えた。

だが、その心構えすら打ち砕く、告げられた信じられない事実。
なのだが――

「もースノウったら何使い古されたネタ言ってるのよ！ そんな技術があつたら、今頃世界中の常識が覆っちゃうよ？」

「まったくです。それはタイムマシーンに匹敵する技術じゃないですか」

「だよね！ それならテスト勉強だつてここでやれば凄いい捗るし、アイテムだつて一日で何個も作れちゃう！」

「本当、夢の様な話ですね。抱えている案件をすべて片付ける事も出来るというのに……」

二人ともそんな訳がないと、話を脱線させて自分の希望や理想を語り始める。

リコに至つては、自分のたまりに溜まった注文を一拳に減らせたらどんなにいいかと言わんばかりにため息をついているくらいだ。

「違うんだよ、信じてくれ！ 嘘だと思ふなら、一回ログアウトしてみろよ！」

「えーそこまで言うかなー？ まあ、ちょっと小腹もすいたしハンバーガー1個たべてこよつかなー」

「でしたら、念のためギルドメンバーにこの毛皮の山の事を伝えて下さいませんか？ ホームページの伝言板に書いておけばインしていない人達にも伝わるでしょうし」

やはり、信じてもらえないスノウの言葉。

いくら親友で、同じギルドのメンバーで、信用にたる人物とは言え、そんな与太話を鵜呑みにする二人ではない。

ましてや、ネット上で語られたり、小説やアニメといったメディアで散々使い古されたネタだ。

無条件で信じてしまう人間の方が少数派だろう。

「ヒロ、お願いだからログアウトしたらずぐ、時計を確認して戻ってきてくれ。10倍も違うんだよ、本当なんだ……」

「……じゃあ、とりあえず行ってくるからね」

さすがにスノウの様子が尋常でなさすぎる事に疑問を感じ始めるヒロだが、そのままログアウトしたのであった。

「ユキ、どうしちゃったんだろう?」

現実世界へと戻り、マシンを頭から外す。

ゲーム内同様、長い髪のヒロは多少髪が乱れた事を気にし、軽く頭を振るう。

いつも一緒に遊んでいたユキが、あそこまで取り乱していた事にしつとも目当ての食料、ハンバーガーとポテトの入った袋へと手を伸ばす。

（あれ? まだあったかいや）

電子レンジで温め直そうと考えていたヒロだが、まだ十分に温かいのでこのままでも平気そうだと、予想外の幸福に軽く喜ぶ。

些細な事にも幸福を見出すのは、彼女のちよつとした特技でもあるのだが、今回のこれは幸福でもなんでもなく――

「ポテト、まだ揚げたてみたい……さすがにちよつとおかしいかも？」

偶然でも幸福でも、ましてやファーストフード業界に革命が起きたわけでも決してない。

「6時……20分……？」

紛れも無い、必然だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4140w/>

異次元での転職願い

2011年11月16日11時10分発行